江藤 淳
etō jun

考える よろこび

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko

考えるよろこび

江藤淳
etō jun

常州大学図書館
藏书章

講談社文芸文庫

考えるよろこび
江藤 淳
二〇一三年一〇月一〇日第一刷発行
二〇一四年 七 月一四日第二刷発行
発行者——鈴木 哲
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2・12・21 〒112-8001
電話 編集部（03）5395・3513
販売部（03）5395・5817
業務部（03）5395・3615
デザイン——菊地信義
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社
本文データ制作——講談社デジタル製作部
©Noriko Fukawa 2013, Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合せは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

講談社文芸文庫

ISBN978-4-06-290209-0

目次

考えるよろこび　七
転換期の指導者像——勝海舟について　四九
二つのナショナリズム——国家理性と民族感情　八七
女と文章　一二五
英語と私　一五三
大学と近代——慶応義塾塾生のために　一九九

資料1　二三八
資料2　二四〇
解説　田中和生　二四三
年譜　武藤康史　二五四
著書目録　中島国彦　二六四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

考えるよろこび

etō jun
江藤 淳

講談社 文芸文庫

目次

考えるよろこび　七
転換期の指導者像――勝海舟について　四九
二つのナショナリズム――国家理性と民族感情　八七
女と文章　一二五
英語と私　一五三
大学と近代――慶応義塾塾生のために　一九九

資料1　二三八
資料2　二四〇
解説　田中和生　二四二
年譜　武藤康史　二五四
著書目録　中島国彦　二六四

考えるよろこび

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

考えるよろこび

講演日　一九六八年三月一三日
主　催　ヤング・セミナー
会　場　京王百貨店ダイヤモンド・ホール

I

私の演題は「考えるよろこび」というのでありますけれども、考えるという人間の行為にはいろいろな方向がある。大きく分けますとわれわれはたとえば自然について考えることができる。自然科学というものは、これは自然の構造や性質を考える学問です。たとえばそういう自然についての考察の中から、今日の文明をつくりあげている原子力から月ロケットにいたるまでの、さまざまな技術上の発見というものも生れる。ここでは、そういう人間の外側にあるものについて考えるという心の働きについては、触れないことにいたします。われわれはたしかに自然にとりかこまれて生きている。人間の体も、あるいは人間の心ですら、自然の一部とみなすことができます。科学的なものの考え方によれば、人間の精神というふうなものも医学的・心理学的な分析の対象になります。精神病理学・精

神分析学などというものはそういう学問です。人間の肉体も、有機体の部品からでき上っている機械とみなして、心臓移植手術をすることもできます。ですから人間そのものを人間の外側に押し出して、これを一つの計量的実験の対象にすることもできる。これは人間に関する自然科学的な考え方ですが、こういう考え方については、私は今日は触れないことにいたします。またその資格もないからです。私は、やはり、人間をうちに含んで考えるという方向の考えかたについて、お話したいと思います。

たとえば、自然現象について考えているときには、人間はいくらでも客観的になることができる。客観的に観察して、いろいろ数をはかったり、量をはかったりしてその結果の正確を期することができる。ところがそこに自分がはいってきますと、人間はどうしても考えのなかに正邪とか美醜とか真偽とか、そういう価値判断を加えざるを得なくなる。このように人間をうちに含んでものを考えようとするとき、わたくしどもはどういう場合に、昂揚を感じるだろうかというと、まずなにかを発見したときだろうと思います。これは学問上の研究などでもそうで、どんなに些細なことでも、いままで気が付かずにいたことに気が付いたような場合です。そしてその発見がいろいろとほかの現象とからまりあって、案外大きなひろがりをもっていることがわかったような場合、そういうときに人間は喜ぶ。何か一種の昂揚を感じるのです。だけれども、どんな人間にとっても一番根本的な問題は自分ですから、自分についてなにかを発見したとき、わたくしどもは目からウロコ

がおちたような啓示を味います。他人のことはどうでもいいとは申しませんが、結局自分というものをひきうけて、わたくしどもは何十年も生きるのですから、この自分についての発見ということが、ものを考える上で一番根本的な基準になろうかと思うのです。

このことの重要性については、昔の人ははやくから気が付いておりました。自分は一体どういうものであり、どこから来てどこに消えて行くのか。自分の正体はいかなるものなのか。そしてその認識を通じて、自分がその一人であるところの人間というものの正体を考えると、それはどういうものになるのか。人間にとって生きるということの意味はどういうことだろうか。こういうことについての思索をはじめようとするとき、わたくしどもはいつの間にか自分を一つの基準にして考えはじめています。お隣のだれを基準にして考えるわけにもいかない。大体わたくしどもは、自分がそれほど追い詰められていないときには、何か他人のことを何やかやとあげつらうことができますけれども、少し深く考えようとすると、いつも自分を通じて人間を考えてしまう。自分を通じて社会を考え、歴史を考える。そういう考えの経路をわたくしどもは無意識のうちにたどっているのです。したがって、自分についての発見ということが、ものを考えるということの出発点でもあり、ゴールでもあるのではないかと思われます。

II

さて、ところで古代ギリシャにソポクレスという劇詩人がおりました。紀元前五世紀のアテナイの人です。この人が『オイディプウス』という有名な戯曲を書いています。これは当時アテナイの町で演ぜられて大評判になり、今日でもギリシャ悲劇の最高の達成だとされている、傑作です。現在でも世界各国の学者によって研究されているし、ときには実際に演じられることもあります。このオイディプウス王の物語については、皆さんは「エディポス・コンプレックス」ということばでご存じでしょう。あのフロイトという人が、オイディプウス王の主題を人間の深層心理に隠されている一つの根本的なモチーフと考えて、精神分析学に応用して「エディポス・コンプレックス」という術語を作った。このことからもうかがわれるように、人間にとって根源的な問題をえがいてる劇であります。

どういう筋かといいますと、古代のギリシャにテーバイという都市があって、この都市をオイディプウスという王様が治めている。ご承知のとおりギリシャは小さな半島ですけれども、そのなかにいくつもの都市国家があって、そこに今日われわれが、民主主義と呼んでいる制度の一番古いかたちが発生したわけです。しかし、このオイディプウス王の物語は、それよりももっと古いギリシャ人にとっても伝説的な時代の物語です。この王様は

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com